

【にんげん部門・優秀賞】

空を見上げて

創価高等学校 1年 坂東 秀樹

ふと、空を見上げることがある。通学路の途中、昼休みの校庭の隅、眠れぬ夜の自室の窓から。そこにはいつも、当たり前のように空が広がっている。青い日もあれば、灰色の日もある。星が瞬く夜も、ただ闇が広がる夜もある。その時々空の模様に、私の心もまた、様々に映り変わる。

友人との些細な口論で心がささくれだった日、見上げた空はどこまでも高く、澄み渡っていた。自分の悩みがちっぽけなものに思え、少しだけ心が軽くなった。一方で、テストの結果に胸を躍らせた日、空には羊雲がのどかに浮かんでいた。その穏やかな景色が、私の高揚感を優しく包み込んでくれるようだった。

私たちは日々、多くの情報に囲まれ、目まぐるしい時間の中を生きている。目の前のことに必死で、周りを見渡す余裕さえ失いがちだ。しかし、そんな時こそ、一度立ち止まって空を見上げてみてはどうだろうか。

空は何も語らない。答えも教えてはくれない。ただ、そこにあるだけだ。だが、その雄大さや静けさに触れる時、私たちは自分自身と向き合う時間を得られるのではないだろうか。日々の喧騒から少しだけ離れ、自分の内なる声に耳を澄ませる。喜びも、悲しみも、不安も、希望も、すべては自分の一部なのだと、空は静かに受け止めてくれるように思う。

特別な出来事があったわけではない。それでも、空を見上げたその一瞬に、私は確かに「人間」としての自分を感じるのだ。果てしなく広がる世界の中で、悩み、笑い、そして前を向こうとする、ちっぽけで、しかし、かけがえのない一人の人間としての自分を。空は、そのことを思い出させてくれる、身近で最も大きな存在なのかもしれない。